

中国におけるお茶文化の展開とその日本への初期伝来

徐 静 波

The Development of Chinese Tea Culture and its Early Spreading
in Medieval Japan

XU Jingbo

抄録

秦の時代までは、茶というものはすでに中国の南西地方で食され、また飲用されていた。漢の時代以後は次第に四川あたりから長江の中流や下流流域に広がり、薬用価値のある食べ物あるいは飲みものとみなされ、隋や唐の時代（約紀元6世紀前後）から、お茶を飲む文化が次第に全国に広がり、お茶は最も重要な非アルコール飲料としての地位が中国で正式に確立した。中国から日本に伝来した初期のお茶文化は、凡そ平安時代前期（9世紀前後）の頃に、半世紀にわたって滅んでしまい、一般社会に定着できなかった。その理由としては、遣唐使廃止によって中国大陸とのつながりが薄くなったこと、初期に伝来したお茶の文化の広がる範囲が極めて狭かったこと、日本人がそれを能動的、創造的に改造する努力が十分でなかったこと、唐代の餅茶の製茶工程の繁雑さなどが挙げられる。

【キーワード】 茶文化 中日文化交流史

一、 中国におけるお茶文化の始まり

茶樹の原産地やお茶を飲む習俗の起源については、さまざまな説があったが、国際学術界の数十年にわたる研究論争を経て、1993年4月に中国雲南省の思茅で開催された中国や日本、米国、韓国など9カ国の学者が参加する国際シンポジウムで、中国の雲南が茶樹の原産地であり、中国の南西地域がお茶を飲む習俗の発祥地で、中国は世界においてお茶文化の故郷であることが合意された¹。現在茶樹の学名は*Camelia sinensis*（ラテン語）で、前者の意味は椿科ということ、後者の意味は中国種ということ。その学名は、中国が世界において茶樹の原産地であることを物語っている。

その結論はさらに二つの事実から実証できる。

一つは植物学的な事実である。

1961年、中国の雲南省勐海県にある大黒山原始林の中、樹齢1700余年、高さ32.12メートルの大きな茶樹が発見された。さらに、1996年、雲南省の鎮沅県九甲郷千家寨で総面積280ヘクタールにわたる広大な古茶林が発見され、そのうちの二本の茶樹の樹齢はそれぞれ2700年と2750年と認定された。それは今まで世界において知られるうちで、最も樹齢の長い野生の茶樹であるとされる²。しかも、それは今日まで生きてきた茶樹

で、その前にも茶樹が存在していた可能性もあるはずである。その事実から、少なくとも2700年前に、茶葉の飲用あるいは食する行為が存在したのではないかと推測できる。

もう一つは歴史学的事実である。

歴史の文献を見てみると、唐の時代の中期ごろの陸羽（785～804年）の『茶経』が世を問う前に、漢文書籍に現れる「茶」についての表現は「茶」が多用され、たまには「茗」も使われる。初めのころ、「茶」や「茗」は必ずしも茶をさすとは限らず、たとえば、『詩経』には「誰謂荼苦、其甘如荠」という言葉があり、『晏子春秋・内篇・雜下』には次のような文言がある。「(晏)嬰相齋景公時、食脱粟之飯、炙三弋、五卵、茗菜而已。」ここでいう「茶」や「茗」はおそらく一種の苦味を帯びる野菜か山菜のことではないか。後世のお茶とは確定しがたいだろう。なぜならば、植物発生学の視点から見ると、茶樹の原産地は湿潤温暖で、霧の多い中国の南西地域で、秦や漢の時代まで、中原地域は南西地方、とりわけ雲南や貴州あたりとの交通は極めて稀で、お茶を飲むあるいは食べる風習はおそらくまだ中原地域に広がっていなかっただろう。明末清初の顧炎武が『日知録』巻七の中にこう述べる。「自秦人取蜀后、始有茗飲之事。」これは歴史の事実に基づいた論述であると思われる。

しかし、漢の時代以降、お茶を飲むあるいは食べる風習は今の四川省あたりではすでに広がっていたと思われる。その時代の「茶」や「茗」はしばしば後世のお茶のことと理解される。文献にもこのような記載は多く見られるようになる。例えば、『神農食經』に「茶茗久服、令人有力、悦志。」があり、『華陀食論』にも「苦茶久食、益思意。」という記述がある。これらの記載はすべて「茶」の脳の保養や健康保持の効用を強調しているので、昔の野菜や山菜をさすわけではないだろう。

前漢の王褒という人が書いた『僮約』は漢の時代にすでに飲茶の風習が存在したことを表す文献としてしばしば引用される。現在の四川省成都に住んでいた王褒は召使の少年に指定した日常の家事に「烹茶尽具、已而盖藏」と「牽犬販鷲、武陽買茶」という文言がある³。この「烹」という表現から見れば、お茶はおそらく一つの飲料となり、わざわざ武陽へ行って買わせるということから見れば、茶葉はすでに一つの商品になり、お茶を飲むこともある程度、一般化していたのではないかとと思われる。

後漢の『説文解字』には、すでに「茶」と「茗」という二文字を収録される。その解釈はそれぞれ「茶、苦茶也」と「茗、茶芽也」とある。その解釈から「茶」と「茗」とがお茶であるとは断定できないかもしれないが、お茶である可能性も高い。漢以後の晋の時代の人郭璞が『爾雅・釈木』の中の「檟」を注解して、こう述べる。「樹小似梔子、冬生葉、可煮作羹飲、今呼早采者為茶、晚取者為茗。一名舛、蜀人名之苦茶。」そこから見ると、「檟」は茶樹であり、「茶」と「茗」は茶葉であることは自明であろう。「煮作羹飲」は後世の飲茶とは多少異なるが、飲み物としては確かに間違いはなかろう。このことはまた『三国志』の記載からも証明できる。当時韦曜という人は孫皓が催した宴会に赴くとき、あまり飲めないで、酒に代わってお茶を飲んだという記載がある。「曜素飲酒不過二升、初見礼異時、常為裁減、或密賜茶以当酒。」⁴ 三国時代の魏国の張揖が撰した『廣雅』はお茶についての記述はさらに詳しくなる。「荆巴(今湖北、四川東部一帯)間采葉作餅、…欲煮茗飲、先炙令色赤、搗末置瓷器中、以汤浇覆之、

特集③ 徐：中国におけるお茶文化の展開とその日本への初期伝来

用葱姜橘子芘之，其飲醒酒，令人不眠。」これは唐の時代のお茶の飲み方とだいぶ近くなっている。

南北朝時代に至ると、長江流域ではお茶を飲むという風習はだいぶ広がっていたが、北方では依然として珍しいものとされた。隋、特に唐の時代になると、統一的な王朝が再び樹立し、南北を貫通する大運河が開通され、お茶を飲む風習がようやく南から北へと全国的に広がっていった。趙榮光氏は『唐韻正』によって、「茶」という文字の出現は約唐憲宗元和（806～820年）前後であり、それまでの碑文にはほとんど「荼」と書かれ、その後は「茶」という文字が頻繁に現れるようになったと指摘した⁵。さらに、陸羽の『茶経』の影響によって、「茶」という文字が本格的に確立し、広く使われるようになった。

以上のような植物学的または歴史学的な考察から、次のような事実が浮き彫りになってきた。つまり、秦の時代まで（紀元前といってもよい）は、茶というものはすでに中国の南西地方で食され、また飲用され、漢の時代以後は次第に四川あたりから長江の中流や下流流域に広がり、薬用価値のある食べものあるいは飲みものとみなされ、隋や唐の時代（約紀元6世紀前後）から、お茶を飲む文化が次第に全国に広がり、お茶は最も重要な非アルコールの飲み物としての地位が中国で正式に確立した。唐宣宗大中十年（856年）に成立した『膳夫經手録』（楊華著）はこう述べている。「茶，古不聞食之，近晋、宋（指南朝時代の宋）以降，吳人采其葉煮，是為茗粥。至開元、天寶年間（713～756年），稍稍有茶，至德、大歷（756～784年）遂多，建中（780～784年）後已盛矣。」

二、中国におけるお茶文化の展開

『茶経』やその他の唐の時代の文献から見れば、当時お茶の産地は今日の四川、陝西、湖北、湖南、雲南、廣西、貴州、廣東、福建、江西、浙江、江蘇、安徽、河南等十四の省に広がり、近代のお茶の産地とほぼ重なっていることがわかる。しかし、唐の時代あるいは『茶経』の時代の中国人のお茶の作り方と飲み方は今日のわれわれの緑茶やウーロン茶のそれとはだいぶ異なる。われわれが今飲んでいるのは煎茶（中国語は葉茶）で、すなわち摘みたてのお茶を大釜に水分が切れるまで炒ってから一週間くらい容器で密封貯蔵した後、熱湯で点てて飲む。それに対して、唐や宋の時代の祖先たちが飲んだのは「餅茶」という物で、其の作り方と飲み方はやや複雑である。まず摘みたてたお茶を甑に入れて蒸し、それが熱いうちに蒸したお茶を搗きつぶし、さらにそれを敲いて一定の形にして焙じ、乾燥させてから貯蔵しておく。飲む前にそれを取り出して火であぶってつぶしておく。水を沸かしてからまず少し塩を入れて調味し、それから粉末されたお茶を投入し、茶筌のようなものでかき回し、再び沸騰したときには飲用できる。『茶経』ではお茶の産地、季節、水源、風炉の温度などについて相当凝っていたにもかかわらず、そのお茶の味と今日われわれが飲んでいるお茶とはかなり差があるに違いない。

面白いことに、今日のわれわれに結構なじみのある緑茶に近いものもない事はない。唐の詩人劉禹錫の「西山蘭若試茶歌」という詩にこう書いている。「自傍芳徒摘鷹嘴，斯須炒成滿室香。」ただし、このような作り方はおそらく主流ではなさそうである。

宋の時代になると、お茶の作り方と飲み方は基本的に唐のそれを受け継いでいたが、若干の改良が見られるようになった。一部のお茶には蒸した後つぶさず、あるいはつぶしては敲かないという「蒸青」または抹茶がある。それはまた「散茶」とも呼ばれる。いわゆる抹茶「中国語では末茶」というものは、前代の技術の上にさらに一步前進し、すなわち焙じたお茶を銀や錬鉄で作られた茶臼を用いて粉末状にひき砕いたものである。飲み方も唐とはやや違うようになって、宋の中期になると、塩などの調味料の使用は廃止され、お茶の本来の味を重んじるようになった。また飲みかたにおいては、「点茶」という仕方が現れた。点茶というのは、沸騰したお湯を茶碗に注ぐとき、茶筴で茶の湯を細かい泡（昔は「湯の花」という）を作り出すということである。作り出した湯の花が茶碗沿いにつく時間が長ければ長いほど腕がうまい。又その人が勝つという。反対に、湯の花が早く消えてしまう人が負ける。それは次第に「闘茶」というひとつのゲームになった。

朝廷への貢茶（地方が中央朝廷に捧げるお茶）は基本的には「団茶」や「餅茶」という形に対して、民間で飲まれるお茶は「散茶」と「抹茶」が多かったようである。宋の時代に、数多くのお茶に関する著作が現れた。蔡襄の『茶録』や宋徽宗の『大観茶論』などはその代表作である。そのような書籍から、当時の中国人はお茶に関する知識が非常に豊富で、お茶を飲むことについてもかなり凝っていたことがわかる。元の時代になると、遊牧民族のモンゴル人に支配されているにもかかわらず、お茶を飲む文化は引き続いた。そのうち、散茶や抹茶の比重が大きくなってきた。朝廷への貢茶は依然として「団茶」や「餅茶」の形が保たれたが、民間で飲まれるお茶は散茶や抹茶のほうが多かった。元の時代中期に刊行された『王禎農書』や『農桑撮要』などの農書では、製茶に関する内容は主に「蒸青」や蒸青抹茶になって「団茶」についてはほとんど言及されなかった。『王禎農書』は茶葉の採取貯蔵について述べるとき、「蒸青」だけを挙げて詳しく紹介した。「采之宜早，率以清明谷雨前者為佳。…采迄，以甄微蒸，生熟得所；蒸已，用筐薄攤，乘濕略揉之，入焙勻布火，烘令干，勿使焦。」⁶

朱元璋が明王朝を樹立した後、農民の負担を軽減する政策を採った。朝廷への貢茶の「団茶」の製作はあまりにもややこしくて複雑だと思われ、「罷造竜団、一照各処，采芽以進」（『餘冬錄摘抄内外篇』）という詔書が発布された。それによって、散茶の製作は大きな進歩をみせた。さらに革命的な進歩は、製茶の主要方式は蒸すから炒るに変革された。1609年刊行された『茶解』（作者は羅廩）にはこう述べていた。「炒茶，铛宜熱；焙茶，铛宜温。凡炒只可一握，候铛微炙手，置茶铛中，扎扎有声，急手炒勻。出之箕上薄攤，用扇扇冷，略加揉捋。再略炒，入文火铛焙干，色如翡翠。」⁷この製茶の技術は、今日まで引き継がれている。現代中国人の製茶の仕方やお茶の飲み方などは、基本的に明の時代とはあまり変わりはない。

三、お茶文化の日本への初期伝来

かつて一部の日本人には、人気のない辺鄙なところに野生茶の跡が残ることや一部の地域に独特な飲茶風習が見られることから、日本にも原生の茶樹があり、8世紀ごろ中国から伝来したお茶文化は、ただその原生茶樹の価値を見直し、お茶を飲む風習の伝播を刺激したに過ぎな

特集③ 徐：中国におけるお茶文化の展開とその日本への初期伝来

いとして、日本茶の「自生説」を主張する人がいた⁸。しかし後に研究が進むにつれて日本茶の「自生説」はほとんど滅んでしまい、中国大陸伝来の見方が一般化してきた。

さて、中国のお茶はいつごろから日本に伝来してきたか。およそ奈良時代の前期（8世紀前半）にお茶が日本に現れたという文献があるようである。奈良時代の王朝の貴重な文物が珍藏されている正倉院に、日付天平十一年（793年）八月十一日の『写経司解』という文献がある。その文献は当時平城京（奈良）東西両市への買い物申請書で、16種類の品物の名称と金額が記載しており、葱・青菜・茄子・薪以外、また「茶廿束、直十四文」という記載がある。同年同月の『写経司解』にも「茶七把、直五文」という記載が見られる⁹。ここで言う「茶」はお茶のことであろうか。まず「茶」を表現する量詞「束」と「把」を見てみよう。このような量詞は野菜や薪などの品を人に連想させ、茶葉に用いるのは無理である。次に価格を見てみよう。同八月十一日付けの『写経司解』にまた「青菜九束、直廿文」という記載がある。茶と青菜の価格を比較すると、茶は青菜よりもかなり安いことがわかる。これを見ると、この茶は明らかにお茶ではないことがわかる。おそらくこれは中国初期の「茶」とは同じ意味で、ある種の苦菜をさすであろう。

そのほか、保延年間（1135～1141年）に成立した歌学書『奥義抄』に、天平元年（729年）四月に聖武天皇が禁庭で百僧を招集して『大般若経』を読誦させ、すなわち季御読経を行うとき、「引茶」という儀式が行われたという記載がある¹⁰。しかし、ここには疑問が二点ある。第一、『奥義抄』が成立したのは12世紀で、8世紀前半に発生した具体的な歴史事件についての記載はどれだけの信憑性があるのか。第二、仮にそのような重大事件が本当に発生したとしても、この年代にもっと近く、797年成立した勅撰史書、つまり正史である『続日本紀』でなぜそれについて何も触れなかったのか。『奥義抄』のこの記載はまったく根拠のない杜撰だと断定できないかもしれないが、その他の諸文献を参照すると、この記載は信憑性のある歴史記録とも思にくいのである。

中日文化交流史の流れや関係文献に基づき、中国のお茶文化の日本への伝来は、凡そ平安時代前期（9世紀前後）と鎌倉時代中期（13世紀初頭前後）という段階を経たと私は思う。茶樹の広い栽培とお茶を飲む文化の本格的な成立は、第二の段階つまり鎌倉時代以後だろう。ただし、平安時代であれ、鎌倉時代であれ、お茶の伝来の使命はいずれも日本の僧侶が果たし、仏教と密接な関係があることは同じである。

日本の正史にお茶に関する記載がはじめて出たのは、藤原緒嗣が840年に編纂した792～833年間の編年史『日本後記』である。『日本書紀』と同じように、これも漢文で書かれたものである。具体的な記載は次のようである。

「同仁六年（815年）四月癸亥、（嵯峨天皇）幸近江国滋賀韩埜，便過崇福寺。大僧都永忠、護命法師等，率衆僧奉迎於門外。皇帝降輿，升堂礼佛。更過梵释寺，停輿赋诗，皇太弟及群臣奉和者衆。大僧都永忠手自煎茶奉御。施御被，即御船泛湖，国司奏風俗歌舞。」¹¹

この漢文は読みづらいかもしれない。主な内容は、嵯峨天皇（786～842年）が近江国滋賀へ巡幸する際、梵释寺で大僧都永忠から自分で煎じたお茶を受けたという歴史を語ったものである。嵯峨天皇は809年に即位し、当時唐の文化に傾倒した天皇で、ご自身も深い漢詩

文の教養があり、書道も優れ、「平安三筆」の一人と称される。天皇へお茶を捧げた大僧都永忠（743～816年）は775年に第十五回の遣唐使と共に唐に渡航し、長安の西明寺で30年間も滞在して805年に日本に戻って大僧都の称号を授かった高僧である。永忠が唐に滞在した30年間のうち、唐は安史の乱（755～763年）が起り、国勢が衰退の途につき始めたとは言うものの、盛唐の氣勢はまったく消えてしまったわけではない。特に、お茶文化は相当成熟した境地に達しつつあった。陸羽の『茶経』はすでに760年前後刊行され、お茶を飲む風習は全国的に広まっていた。「人自怀挟，到处煮飲，從此伝相仿效，遂成風俗。自邹齐沧棣浙至京邑，城市多開店舖煎茶売之，不問道俗，投錢取飲。」¹³唐の中期の文人白居易や柳宗元などの詩文に、お茶に関する記述はよく見られる。

「移榻樹陰下，竟日和所為。或飲一瓭茗，或吟兩句詩。」（白居易『首夏病閑』）

「閑撫素琴曹吏散，自烹新茗海僧來。」（李中『贈牯山孫明府』）

文人の生活には、お茶は単なる脳の保養や健康保持の飲み物ではなく、又非常に雅な趣に満ちるものと見なされる。その時、寺院の僧侶たちがお茶を飲むということも一般的になった。大智禪師懷海（724～814年）が制定した『禪門規式』（後に『百丈清規』としてよく知られる）には、寺院におけるお茶の儀礼がすでに定められていた。特に注意すべきなのは、1992年に長安西明寺遺跡を発掘するとき、唐の茶臼が発見され、其の台座に「西明寺」がはっきりと刻まれていることである¹³。これは永忠が30年間滞在した西明寺では、お茶を飲むことが本当に「日常茶飯事」になったことを力強く物語っている。このような風習に染められ、言うまでもなく、永忠もお茶を飲む習慣を身につけ、しかもそれを風雅な行事と見ていたに違いない。

帰国10年後永忠が嵯峨天皇にお茶を捧げた史実から見れば、以下の二点が推測できるのではないか。第一に、彼は唐から茶葉とお茶の種を日本に将来したこと；第二に、彼が自分の住んでいる寺院の境内あるいはその近くに茶樹を栽培したこと。そうでないと、なぜ10年以上たっても依然として天皇へお茶が捧げられるのか解釈しがたくなる。嵯峨天皇ご自身も永忠の献茶を大いに賞賛し、お茶のことをだいふ気に入ったようである。『日本後記』にはこのような記載がある。

「(同年)六月壬寅，(嵯峨天皇)令畿内并近江、丹波、播磨等国殖(“植”)茶，毎年献之。」
実際は、嵯峨天皇は永忠のところで初めてお茶に触れるわけではなさそうで、永忠もお茶を中国から将来した第一人者でもなさそうである。永忠と同年日本に帰国した留学僧には有名な最澄（767～822年）というお坊さんがいる。ただし、彼は中国の浙江あたりにたった一年間しか滞在しなかった。彼は天台山の仏龍寺で修行し、日本へ帰国して天台宗を開き、日本の天台宗の開祖で、諡号「伝教大師」という。唐の時代、天台山あたりはすでにお茶の名産地となり、茶園はいたるところで見られる。最澄が修行した時の師であった行滿は仏龍寺の下の智者塔院でお茶の儀礼などを司る「茶頭」を務めた。そこから見ると、当時の寺院には献茶や供茶などの例規はすでに確立し、当然のこととして、ここで修行している最澄は茶葉や飲茶のことに関心を寄せるはずである。805年の春、当地の台州刺史陸淳は帰国しようとする最澄に送別会を催した。僧侶は酒を飲んではいけないという戒律があるため、酒の代わりにお茶が出された。最澄が後に著した『顕戒論縁起』に当時の台州司馬が書いた『送最澄上人還日本国序』を引用

特集③ 徐：中国におけるお茶文化の展開とその日本への初期伝来

した。「三月初吉，遐方景濃，酌新茗以餞行，对春風以送遠。」¹⁴

最澄が帰国した際、仏教の經典を数多く将来したのみならず、茶樹の種も持ち帰ったそうである。其の種を今の滋賀県大津市坂本町日吉神社の周辺に植え付け、その茶樹は日本最古の茶樹と見なされ、日吉茶園も日本最初の茶園と見なされた。又それを証明するような石碑も建てられている。文献から追求すると、そういった見方は『日吉社神道秘密記』より由来したようである。その文献にはこのような記述がある。「茶の木数多之れ有り。石像仏体之れ有り。伝教大師御建立の所。茶の実大唐従り大師久求持し玉いて、御帰朝有りて此の処植え玉う。其後山城の国宇治郡梶尾所々に植弘め給と云云。」¹⁵

しかし、ここには二つの疑問がある。第一、『日吉社神道秘密記』の作者丸九は16世紀の人物で、この秘密記は凡そ天正三年より五年（1575～77年）間に書かれたものと思われ、それまでの関係記録は見られない。その年代は最澄が茶樹を植えた805年より770年も隔たりがあり、その史実の信憑性はかなり疑わしいものと思われる。第二に、その記述の最後の文字は「云云」で、つまり作者も伝聞によるもので、確実な証拠はどこにも見当たらない。正式な最澄の伝記にも、最澄がお茶を中国から将来した記述はない。建てられた石碑も後世の人の所為であり、佐賀県諸富町浮杯などに建てられた「徐福上陸地」の石碑と同じように、可能性を示唆しているが、確実な歴史的な証拠とはいえない。それについて、江戸時代の国学者前田夏陰が『木芽説』の中に「何の証拠もなき、甚だしきあやまりなれば論にも及ばず」¹⁶と否定した。

ただし、逆に最澄がまったく唐から日本にお茶を持ち込まなかったと徹底的に否定する史実も挙げられないであろう。実際に、他の文献から最澄が確かに日本でお茶を飲んだことが分かる（もちろん、これは日吉茶園などの話とは同列に論じるものではない）。事実としては、嵯峨天皇は最澄と交際したことがある。嵯峨天皇の「答澄公奉献詩」にこのような内容がある。「羽客亲講席，山精供茶杯。深房春不暖，花雨自然来。」¹⁷

この詩から見ると、嵯峨天皇は確かに最澄の僧房で献茶を受けたことがある。最澄が中国からお茶を将来して植えたことはまったくの風説とは断定できない。

中国からお茶を将来することにまつわるもう一人の僧侶は津々浦々に知れ渡る空海、すなわち弘法大師（774～835年）である。空海は最澄と同じ年にそれぞれ違った船に乗って遣唐使として中国に派遣されたが、北の長安の青龍寺で恵果に師事して密教を修行し、三年後日本に帰ったのである。中国滞在の時期は最澄より長い。中国滞在の三年間に、言うまでもなくお茶を飲んだ経験がある。空海も前文に触れた西明寺に住んだことがある。『弘法大師年譜』に「大師入唐帰朝の時茶を携え来って嵯峨天皇に献ず」という記載がある¹⁸。しかし、この年譜は江戸時代の天保四年（1833年）に成立したもので、空海がなくなった千年後の人が編纂したもので、その信憑性もまた疑わしい。とはいえ、空海が日本に帰国した後、頻繁にお茶を飲んだという当時の文献が残っている。空海は嵯峨天皇との交際も親密のようである。嵯峨天皇は「與海公（即ち空海のこと）飲茶送帰山」という漢詩にこう述べている。

「道俗相分経数年，今秋晤語亦良縁。香茶酌罢日雲暮，稽首傷離望雲煙。」¹⁹

公家の仲雄王の「謁海上人」も空海と一緒に茶を飲む光景を描いている。

「石泉洗鉢童， 炉炭煎茶孺。」²⁰

空海も「暮秋賀元興僧正大徳八士詩并序」にこう書いている。

「聊與二三子， 設茶汤之淡会， 期醍醐之淳集。」²¹

又空海自身もほかの僧侶からお茶の寄贈を受けたことがあり、贈答の礼状に「思渴之次， 忽惠珍茗， 香味俱美， 每啜除疾， 愧荷何喻」という言葉がある²²。

または、三大勅撰詩集『文華秀麗集』・『凌雲集』・『経国集』にもたびたびお茶を歌う詩が見られる。例えば嵯峨天皇の「秋日皇太弟池亭」に「肅然幽興処， 院里滿茶煙」（『凌雲集』）、「夏日左大將軍藤原冬嗣閑居院」に「吟詩不縁厭搗香茗， 乘輿偏宜聽雅琴」（『凌雲集』）、淳和天皇の「夏日左大將軍藤原朝臣閑居院納涼探得閑宇応制」に「避景追風長松下， 提琴搗茗老梧閑」（『文華秀麗集』）、錦部彦公の「題光上山人院」に「相談酌緑茗， 煙火暮雲間」（『文華秀麗集』）などが拾える。

平安前期の日本にお茶を飲むことが確かに存在したという事実はまた別の類の文献からも証明できる。京都山科にある古儀真言宗の安祥寺も、中国から帰国した留学僧の恵運律師によって開山されたものであるが、そこに残されている『安祥寺伽藍縁起流記資財帳』には、唐の貞観九年（867年）のものとして「白瓷茶瓶子一口」、「同茶碗一口」、「茶床子十九前、茶碗六十一口」などと記録されており²³、僧院での飲茶の普及を知ることができる。

以上のような文献を検討することにより、以下のような事実が得られると私は思う。

第一、中国のお茶文化は凡そ平安時代前期の9世紀初頭前後日本に伝来し（8世紀はちょうど中国のお茶文化の開花期でもある）、伝入してから日本においては半世紀くらいの隆盛期がある。中国から持ち帰った茶葉以外、日本の本土にもある範囲の茶樹栽培があるはずである。その製作および引用の方法は、大抵唐の時代の「餅茶」と同じである。

第二、当時お茶を中国から将来したのは、主に遣唐使と同時に中国に渡った留学僧である。文献から考証できる主な人物には永忠、最澄、空海などが挙げられる。最澄に関する事跡は、関係する宗派の典籍にはやや大げさに表現されている。これについて小川後楽氏は「おそらく茶が一般に広く流行した時期に、それぞれの宗派の思惑がからんで、茶種伝来の始祖作りが行われたものと思う」と分析した²⁴。ただし、お茶は主に僧侶の手によって伝えられたことは争う余地のない事実であろう。

第三、9世紀前期の日本における飲茶の状況は、文献にはかなりの記録が見られるが、その伝播の範囲は一部の寺院や宮廷貴族の生活圏にとどまり、民衆の階層には広がっていなかった。地理的に言うと、基本的には京都と奈良の周りに限られ、その展開の空間はかなり制限されていた。

第四、平安前期の上流社会は先進的な中国文化への強い憧れがあったが、お茶の伝入量あるいは産出量は少ないため、飲茶は当時の日本人一たとえ上流社会の王侯貴族と高級僧侶であっても一にとっては日常茶飯事とは言いがたく、お茶の脳の保養や健康保持の効用というより、むしろその精神的な価値、つまり文人の風雅な趣がより求められていたのであろう。したがって、飲茶は常に撫琴、吟詩、美景の観賞などとつながり、一種の雅な風流事として表現されていた。以上引用した一部の詩文からその真味が窺

特集③ 徐：中国におけるお茶文化の展開とその日本への初期伝来

われる。藤軍氏は『中日茶文化交流史』に「日本お茶文化の発展モデルは精神文化からスタートしたのである」²⁵と指摘したが、一理あると思う。

不思議なことに、もともと上流社会に好まれた飲茶は、9世紀の後半期から次第に廃れていき、絶滅とっていいぐらい状態に陥った。その理由については諸説があるが、日本の主流意見はそれをおおむね以下の二点に帰着する。一点は9世紀後半期に入ると、遣唐使の派遣を廃止し（正式な廃止は894年で、実際に最後の派遣は838年である）、中国との政府レベルの交流は長期にわたって停滞状態にあった。それによって、中国大陸文化の影響は次第に衰えてゆき、外来文化の一つであるお茶文化も日本の舞台から姿を消した。このような見解を持つ代表的な学者には熊倉功夫氏がいる。熊倉功夫氏は「遣唐使が廃止され、中国一辺倒から国風文化への時代がきた平安時代中期以降、しばらく茶の歴史は中断近い状態となった」と述べた²⁶。もう一点は、唐代から伝来したのは餅茶あるいは団茶で、団茶の製作工程と点て方は面倒で、その味は日本人の口に合わないという理由。ここで又熊倉功夫氏の別の著作の内容を引用しよう。

「なぜ8世紀の茶は定着せず、13世紀の茶は定着したのであろうか。ここにも嗜好の問題がかかっていると思われる。奈良時代末に入った団茶といわれる後発酵茶であると推定される。生葉を加熱し柔捻乾燥して一般の茶はできるのであるが、後発酵茶というのは柔捻の後に発酵させる工程がさらに加わってある種のカビが生じ、その結果、独特の味と臭気が付加された茶である。団茶はこれを固形にしたもので運搬の便によく、大きさも大は数十キログラムのものから小は貨幣大のものまで、各種の団茶が作られた。」²⁷

しかし、この二点の理由はすべての疑問を解消したわけではない。とりわけ唐代の団茶を後発酵のものだと主張する二点目の説明は、技術的には検証されていない。熊倉功夫氏の表現も「推定」という言葉を使っていた。その後、中国の学者は陸羽の『茶経』にある製茶工程に関する内容を入念に研究して、唐代の団茶は発酵工程を加えられていないもので、緑茶の類に帰するものだという新しい研究成果を発表した²⁸。実際に、唐代の餅茶あるいは団茶は宋代の団茶とは製茶工程に多少違いがあるが、大きな変化はない。熊倉功夫氏を代表とする日本学界の主流意見が十分な説得力を持つものとは認めがたい。

事実、近年来、一部の日本側の学者と中国側の学者はそれと違う説を出している。民間の茶文化研究者である小川英樹氏は「飲茶の歴史」という論文の中にこう指摘した。

「中国よりわが国へ伝えられた当初の飲茶の風習は、薬的もしくは珍品として、あるいは宗教的な儀式に留まり、結局は先に述べたように唐文化への模倣に過ぎなかったため、同化への試みがなされなかった。」²⁹

中国学者の関剣平氏は文化伝播モデルの視点から、茶文化の中国から日本への初期伝播の失敗の理由について、平安前期の日本が外来の中国の茶文化への吸収はただ受動的な模倣に留まり、自国本来の文化に基づいた創造が欠けていたと指摘し、さらに次のように述べた。「平安時代の日本が中国の飲茶習俗を受け入れる時、それを改造する力はまだ持っていなかった。それがこの時期の日本が中国の茶文化を十分消化できない根本的な理由である。」³⁰この見解は問題の本質を端的に突いていたと私は思う。

上述をまとめると、唐代の茶文化が日本に伝来してまもなく、三百年近く途絶えた原因は以

下の数点にあるのではないかと思う。第一に、茶文化が伝来して久しくない838年以後の数百年のうちに、中日両国の間に、政府間にせよ民間にせよ大規模の往来はなかった。9世紀以後唐王朝の衰退は日本人の大陸への憧憬を薄め、平安時代中期以後の国風文化の成長も日本人の外来文化への関心を弱めた。これは背景的な要因である。第二に、茶文化が伝来してから半世紀の間、その伝播の範囲はずっと王侯貴族のレベルと都周辺の一部の寺院に留まり、一般庶民どころか、地方の豪族や僧侶にとってもお茶はほとんど馴染みのないものである。伝播（飲用と栽培両方）空間の狭さはその一般社会への影響力を大いに妨げた。第三に、茶文化を受けた上流貴族や僧侶たちは、お茶を日常の飲み物というより、むしろ一種の風雅な趣として楽しんで、その精神的な価値を重んじ、それを自民族の生活習慣へ融合させようという努力は見られなかったようである。当時の日本の文化レベルに制限され、日本では主にそれを受動的な吸収や模倣することに留まり、進んで自民族文化の特徴を生かしてそれを創造的に改造することは無く、即ち同化する試みがなされなかったのである。第四に、唐代の餅茶の複雑な製茶工程と日本風土に少し合わない風味もお茶の日本全土への広がりや定着を阻害した原因の一つであろう。

周知のように、大陸の茶文化が日本全土へ広がって定着し、さらに茶道を生むのには、鎌倉時代中期（13世紀）栄西をはじめとする僧侶たちの努力を待たなければならない。紙面の制限で、本稿はそれに触れないこととしておく。

-
- 1 1993年4月17日付けの『人民日報』海外版に掲載された新華通信社による記事「お茶の故郷が普洱であると専門家は認定」。
 - 2 陳文華『中国茶文化史』15～16ページを参照。中国農業出版社2006年。
 - 3 この部分で引用したお茶に関する古代の文献は、特別の説明以外はすべて『中国茶葉歴史資料選輯』によるものである。北京農業出版社、1981年。
 - 4 『三国志・呉書・韋曜伝』、653ページ、中州古籍出版社1996年。
 - 5 趙栄光『中国飲食文化史』、162ページ。上海人民出版社2006年。
 - 6 陳宗懋編集『中国茶経』「茶史編」の中の「古代茶事」の部分参照、25ページ、上海文化出版社1992年。
 - 7 羅廩『茶解』、『茶書集成』、208ページ。黒竜江人民出版社2001年。
 - 8 人見必大『本朝食鑑』（1697年）、村山鎮『茶通鑑』（1900年）、谷口熊之助『野生茶調査報告』（1936年）等を参照。
 - 9 林屋辰太郎『図録茶道史』58～60ページを参照。淡交社1980年。
 - 10 前掲書、57ページ。
 - 11 『日本後記』巻第廿四、八木書店2002年。
 - 12 『封氏見聞記』巻六、欽定本四庫全書子部一六八・雜家類、上海古籍出版社復刻本、第862冊、442ページ。
 - 13 安家瑤「唐長安西明寺遺跡の考古発見」、『唐研究』第6期、2000年。
 - 14 最澄『顕戒論縁起』、『伝教大師全集』巻一、比叡山専修院付属比叡山学院編集、日本仏書刊行会、1975年。
 - 15 『日吉社神道秘密記』、ここは小川後楽著『茶の文化史』76ページから引用。文一総合出版、1980年。
 - 16 前掲書。
 - 17 『文華秀麗集』巻中、『懐風藻・文華秀麗集・凌雲集・経国集・本朝麗藻』（与謝野寛ほか編纂校訂）、現代思想社1982年。

特集③ 徐：中国におけるお茶文化の展開とその日本への初期伝来

- 18 『弘法大師年譜』（得仁撰）、『真言宗全書』第38巻、真言宗全書刊行会1939年。
- 19 『経国集』、『懐風藻・文華秀麗集・凌雲集・経国集・本朝麗藻』（与謝野寛ほか編纂校訂）、現代思想社1982年。
- 20 『凌雲集』、『懐風藻・文華秀麗集・凌雲集・経国集・本朝麗藻』（与謝野寛ほか編纂校訂）、現代思想社1982年。
- 21 『性霊集』、『弘法大師空海全集』第6巻、筑摩書房1984年。
- 22 空海『高野山雑筆集』下、『最澄・空海集』（渡邊照宏編集）、筑摩書房1969年。
- 23 小川後楽著『茶の文化史』78ページを参照。
- 24 前掲書、79ページ。
- 25 藤軍『中日茶文化交流史』、38ページ、北京・人民出版社2004年。
- 26 熊倉功夫『茶の湯の歴史』、35ページ、朝日新聞社1990年。
- 27 熊倉功夫「日本の食事文化における外来の食」、石毛直道監修、熊倉功夫責任編集『講座食の文化二 日本の食事文化』、160ページ。味の素食文化センター、1999年。
- 28 関剣平「お茶文化伝播モデルについての研究——平安時代の日本のお茶文化を例に」（上）、『飲食文化研究』2006年第2期。
- 29 小川英樹「飲茶の歴史」、芳賀登ほか監修『全集・日本の食文化』第6巻、115ページ、雄山閣1996年。
- 30 関剣平「お茶文化伝播モデルについての研究——平安時代の日本のお茶文化を例に」（下）、『飲食文化研究』2006年第3期。